

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ(第三十七回)

かななびやま

「飛鳥の神奈備山」

あまかしのおか

〜甘樫丘説〜

みもろ

かななびやま

ぐも

三諸の 神名火山ゆ との曇り 雨は

き

あまぎ

降り来ぬ 雨霧らひ 風さへ吹きぬ

おおぐち

まかみ

しの

大口の 真神の原ゆ 偲ひつつ 帰り

い

にし人 家に到りきや

作者 未詳

卷十三―三二六八

(解説) 三諸の神名火山から一面にすっかり雲って雨は降って来た。

雨は霧のように降って風までも吹いて来た。真神の原を通って、私を思いながら帰って行ったあの人は、家についたかしら。

● 三諸の神名火山⇨飛鳥の神奈備山・神岳(神の御座所)

● との曇り⇨すっかり曇って

いかづちのおか

● 真神の原⇨奈良県高市郡明日香村。 雷丘(標高110mほどの丘)の近く

から南の方の平地。飛鳥寺の近傍。

● 大口の⇨枕詞。真神にかかる。真神の原は、当時、狼が大口を開けて吠えている。そんな荒涼たる原野だったらしい。(参照) 日本古典文学大系

あまかしのおか

● 甘樫丘は飛鳥川を隔てて雷丘と向かいあっているが、雷丘より約40m高く

南に尾根を伸ばしている丘陵であるので、真神の原を中心とした飛鳥のどこ

からでも眺められる。

● 甘樫丘が神岳（神奈備山）とする説に折口信夫著「万葉集卷三講義」坂口保著「万葉集大和地理辞典」和田嘉寿男著「大和の万葉」などに確かに神岳（神奈備山）は雷丘であるが、万葉の神岳も雷岳もともに現在の雷丘をさすのではなく、いずれも甘樫丘を指すものであると述べている。「万葉の歌」保育社、参照）

（写生地） 飛鳥寺の近傍と推定されている真神の原（飛鳥寺横地）から飛鳥寺と後方に甘樫丘を描く。（杏花）

